

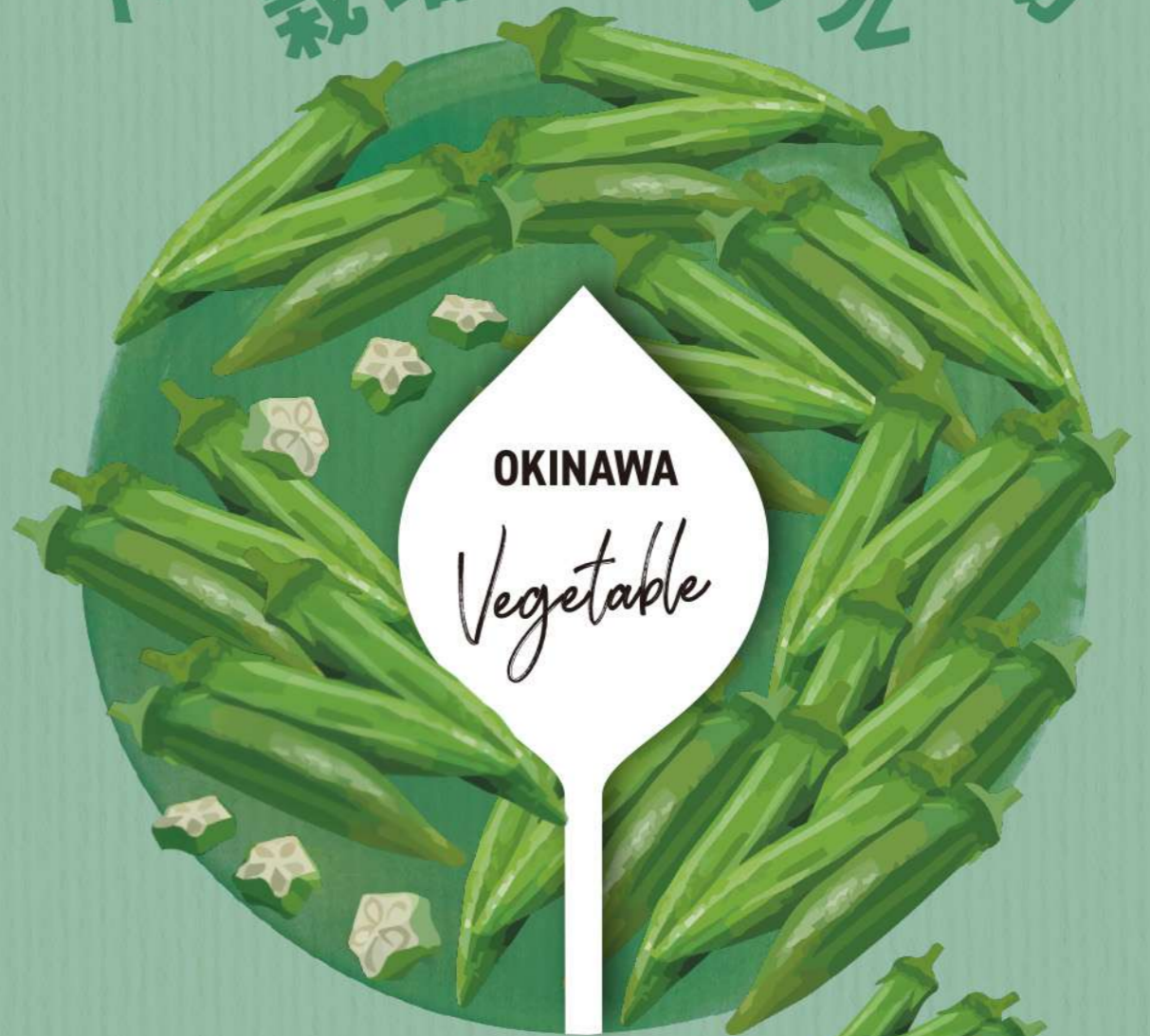
沖縄県特別栽培農産物 栽培マニュアル

沖縄県特別栽培農産物栽培マニュアル

オクラ



作物編
オクラ
OKRA



作物編
オクラ
OKRA



OKINAWA VEGETABLE



作物編
オクラ
OKRA



INDEX
沖縄県特別栽培農産物
栽培マニュアル
——作物編——

オクラ



特別栽培農産物とは

特別栽培農産物認証制度について	p.03
特別栽培農産物栽培マニュアルの使い方	p.04
オクラの特裁基準	p.04

オクラの特別栽培

事前準備

主要作型と特裁基準達成のポイント	p.05
前作の振り返りと対策	p.07

肥培管理

特別栽培における施肥	p.09
基肥の施用例	p.10
追肥の施用例	p.12
草勢判断と摘葉	p.13
オクラの栄養障害	p.14
事例紹介 (ジャーガル、島尻マージ)	p.15
特裁区の土壌分析と基肥	p.15
特裁区の追肥	p.16
特裁区の収量/コスト比較	p.17
圃場の様子	p.18

病害虫管理

特別栽培における病害虫管理	p.19
Point 01 病害虫を発生させない	p.20
土づくりから栽培終了までの環境づくり	p.21
Point 02 病害虫を入れない	p.21
物理的に入れない対策	p.21
Point 03 病害虫を増やさない	p.22
病気の防除	p.22
オクラの主要病害の観察ポイント	p.23
主要病害の発生生態と対策	p.24
・地上部病害	p.24
・土壌病害	p.25
害虫の防除	p.27
オクラの主要害虫の観察ポイント	p.28
主要害虫の発生生態と対策	p.29
事例紹介	p.31

巻末資料

オクラの主要病害登録殺菌剤一覧	p.32
オクラの主要害虫登録殺虫剤一覧	p.33

特裁農産物とは

事前準備

肥培管理

病害虫管理

巻末資料

特別栽培農産物とは

生産された地域の慣行レベル(各地域の慣行的に行われている節減対象農薬及び化学肥料の使用状況)に比べて、化学合成農薬(以下、農薬)のうち節減対象農薬(ページ下部「用語の説明」※1)の使用回数が50%以下、化学肥料の窒素分量(※2)が50%以下で栽培された農産物です。



農林水産省HP

(農林水産省「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」)

本マニュアルでは、特別栽培農産物の栽培方法を「特別栽培」と表記し、「特裁」と省略することがあります。

沖縄県特別栽培農産物認証制度について

沖縄県では、「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」に基づき、県内で栽培された農産物を『沖縄県特別栽培農産物』として認証しています。認証を受けた農産物は、県の認証を受けた旨を表示する認証マークを貼付し、出荷・販売できるようになります。

この制度によって、消費者の県産農産物への信頼を高めるとともに、環境に配慮し、持続可能な環境保全型農業の推進を図ることを目的としています。



沖縄県特別栽培農産物認証マーク

沖縄県特別栽培農産物認証制度の詳細や県慣行レベルについて

沖縄県営農支援課HP



認証に係る計画書や申請書については、各地域の県農業改良機関又は沖縄県農業協同組合営農振興センターに提出となります。

用語の説明

※1 節減対象農薬

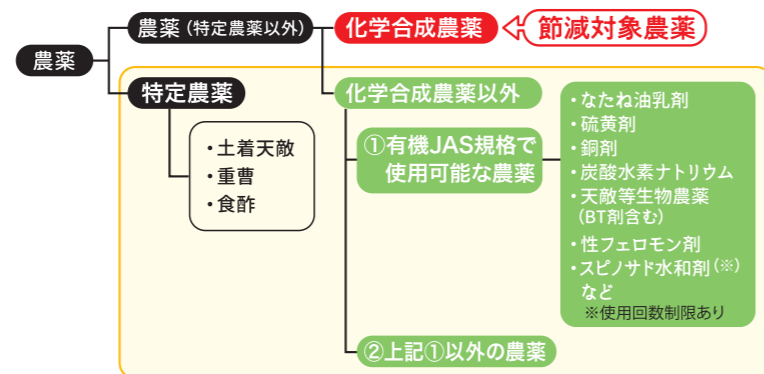
「化学合成農薬」から「有機農産物のJAS規格で使用可能な農薬」を除外したもの。特別栽培では、節減対象とされている化学合成農薬の使用回数を50%以下にする必要がある。

※2 化学肥料の窒素分量

化学肥料に含まれる窒素成分の量。

特別栽培では、化学肥料由来の窒素分量を50%以下にする必要がある。

(例) 15-15-15の成分表示の化学肥料20kgに含まれる窒素成分: 20kg×15%=3kg



特別栽培農産物栽培マニュアルの使い方

本マニュアルは、品目共通の『基礎技術編』と、品目別の『作物編』に冊子を分けて構成しています。沖縄では地域や圃場(施設)によって土壌の性質が異なるため、土壌ごとの栽培事例を可能な限り掲載しました。生産者のみなさんが、自身の栽培環境に適した、取り組みやすい技術から導入できる構成となっています。

- まずは『基礎技術編』で、土づくりや病害虫管理の全体的な特裁ポイントを理解し、実践しましょう。
- 次に、『作物編』で品目ごとの特裁ポイントを確認し、施肥や防除について具体的な事例を参考にしながら、実際の栽培管理に取り入れていきましょう。



作物編の特徴

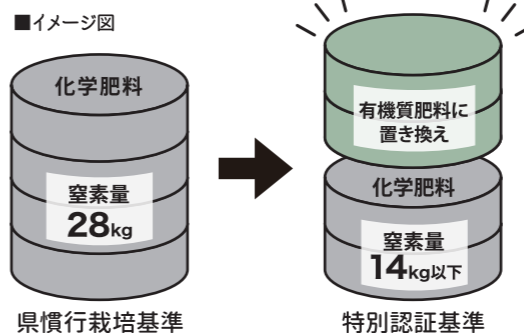
- 品目別の施肥管理、病害虫管理について具体的に記載
- モデル圃場*で実践した特別栽培と慣行栽培の比較事例を掲載
*土壌別(ジャージャー、島尻マーシ)で設置

オクラ(露地・トンネル)の特裁基準

特別栽培農産物認証を取得するためには、以下の2つの基準を満たす必要があります。

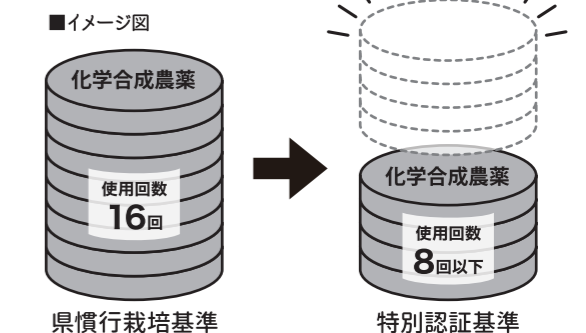
基準1 化学肥料由来の窒素 **50%低減**

オクラで1作10a当たり28kgとされている窒素量の化学肥料分合計を14kg以下に抑える。



基準2 節減対象農薬の使用回数 **50%低減**

オクラで1作上限16回とされている化学合成農薬の合計使用回数を8回以下に抑える。

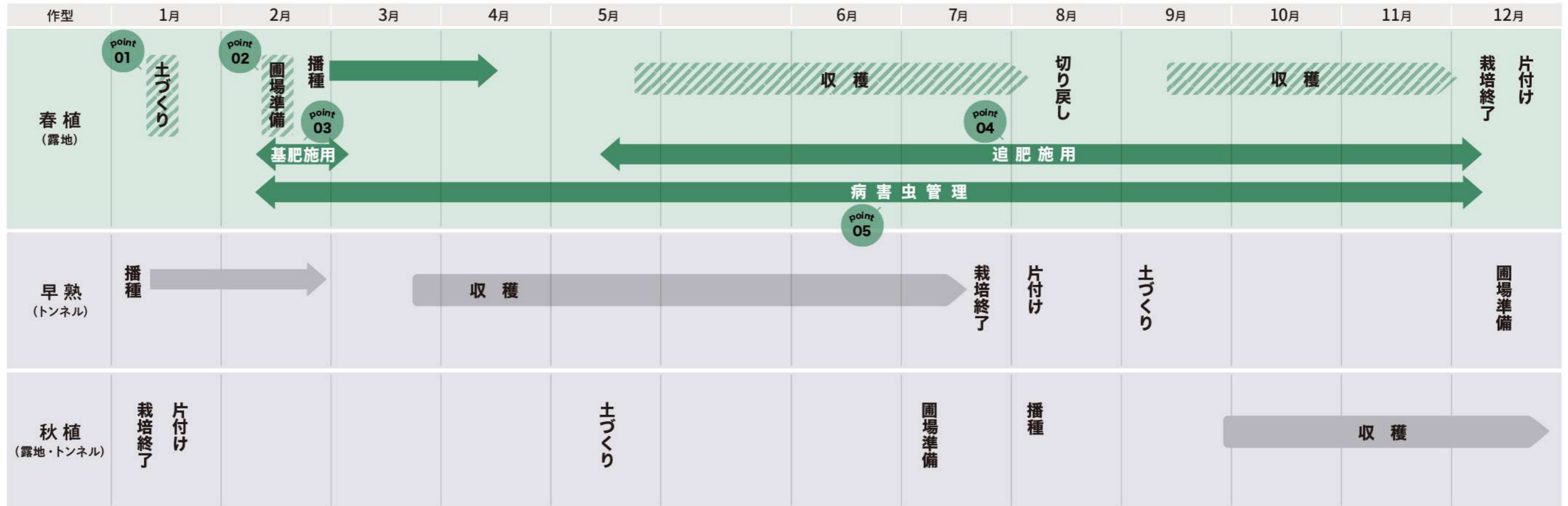


おことわり 図は露地・トンネルの場合の特裁基準となります。

主要作型と特栽基準達成のポイント

沖縄のオクラは、春植(露地)と、その切り戻し栽培が主流ですが、早熟(トンネル)や、秋植(露地・トンネル)などの作型があります。
本マニュアルでは、特栽到達の可能性が高い春植切り戻し栽培を中心に紹介します。

表のポイント1(土づくり)~5(病害虫管理)それぞれのテーマについて、このマニュアルと『基礎技術編』の該当ページを見ていきましょう。



事前準備

主要作型と特栽基準達成ポイント

point 01 土づくり

物理性、生物性の改善による
根の張りやすい環境づくり

詳しくは、『基礎技術編』 p.5~17



『基礎技術編』
掲載ページ



※品目共通の『基礎技術編』は、このマニュアル(『作物編 オクラ』)とは冊子が異なりますのでご注意ください。
『基礎技術編』は上のQRコード(沖縄県営農支援課HP)から閲覧できます。

point 02 圃場準備

土壌消毒・物理的防除・除草など
事前にできる予防(病害虫管理)

このマニュアル「病害虫管理」へ p.19~21

詳しくは、『基礎技術編』 p.28~34

point 03 基肥

化学肥料を有機質肥料・
有機配合肥料に置き換える

point 04 追肥

化成肥料中心
後半に一部有機配合肥料を使用

このマニュアル「肥培管理」へ p.9~14

このマニュアル「事例紹介」へ p.15~18

肥料一覧は『基礎技術編』 p.49

point 05 病害虫管理

節減対象ではない農薬や選択性殺虫剤を
優先使用し、節減対象農薬の使用回数を
後半に残す

このマニュアル「病害虫管理」へ p.22~30

このマニュアル「事例紹介」へ p.31

詳しくは、『基礎技術編』 p.27~46

前作の振り返りと対策

栽培を始める前に、まずは前作を振り返って、圃場の状況をチェックしましょう。
 下表で、自身の圃場に該当するチェック項目の問題点・要因と、
 それに対して取るべき対策を、ここでしっかり把握することが大切です。



事前準備

前作の振り返りと対策

	✓ チェック項目	問題点・要因	特裁における対策
土づくり	<input type="checkbox"/> 排水性が悪い	・透水性不良で地表に停滞水が生じる	物理性・生物性の改善 物理性改善 <方法> サブソイラ、プラソイラ等による心土破碎 <効果> 排水性改善、土壤硬化防止 生物性改善 <方法> 有機物（緑肥・堆肥等）の利用 <効果> 土壤生物多様性の確保、 土壤病原菌の抑制
	<input type="checkbox"/> 耕盤層※ができていない ※トラクターなど、機械の重みで硬くなった土の層	・作物の根腐れや病気を誘発する	
	<input type="checkbox"/> 有機物を投入していない	・土壤が団粒化しにくい ・通気性、透水性が悪化する ・作物の根が張らず生育不良となる	
施肥管理	<input type="checkbox"/> 土壤診断をしていない	・肥料過多による塩類集積で根が損傷し、 養分を吸収できず生育不良となる ・要素欠乏で収量・秀品率が低下する	土壤診断に基づく施肥設計、化学性の改善 化学性改善 <方法> 土壤分析、施肥設計 ・栽培終了後（または開始前）の土壤診断結果を基準値と比較する ・基準値は沖縄県が発表している「沖縄県土壤診断基準値案」等を参考に ・土壤分析の数値が基準からずれている場合は、土壤の適正化に必要な 施肥量をできるだけ正確に計算し、施肥設計を行う <効果> 土壤養分・pHの適正化
	<input type="checkbox"/> 土壤診断の結果を基に施肥設計をしていない		
	<input type="checkbox"/> 肥料過多や肥料不足による生理障害が発生した		
	<input type="checkbox"/> 土壤pHが作物の適正值でない	・オクラの適正pHは6.0～7.0 ・酸性土壤では生育不良となる	詳しくは、『基礎技術編』 p.5~17
病害虫管理・その他	<input type="checkbox"/> 根こぶ線虫病や土壤病害が発生した	・病原菌が潜伏している可能性がある  根こぶ線虫病 苗立枯病	予防策の徹底 病害虫を「発生させない」「入れない」圃場管理 発生させない ・土壤消毒、排水性改善、圃場の除草徹底 ・連作を避ける ・セルトレイ苗の根鉢保護移植 入れない ・防風ネットの設置 ・ソルゴー障壁の設置
	<input type="checkbox"/> 立枯病が発生した		
	<input type="checkbox"/> 風の被害で生育に影響があった	・生育不良や根痛みにより、病害虫を誘発してしまう可能性がある	



排土型心土破碎機
例：プラソイラ



ソルゴーの栽培によって、
団粒化した土壤



土壤還元消毒



畝上に植穴を掘って培養土を充填し、
オクラのセルトレイ苗を移植する
(詳細p.25)



ソルゴー障壁

特別栽培における施肥

基準1 化学肥料由来の窒素 50%低減

特別栽培では、化学肥料由来の窒素成分の施用量を慣行基準の50%以下にするため、基肥は有機質肥料に置き換え、追肥は化学肥料と有機質肥料を併用するという考え方で進めます。

『沖縄県野菜栽培要領』によると、オクラ1作に必要な窒素成分量は10a当たり28kg、その内訳は基肥で12kg、追肥で16kgです。ここで基肥を全て有機質肥料に置き換え、追肥の一部で有機質肥料を使うと、化学肥料由来の窒素施用量が慣行基準の50%以下に減り、特裁基準を達成します。

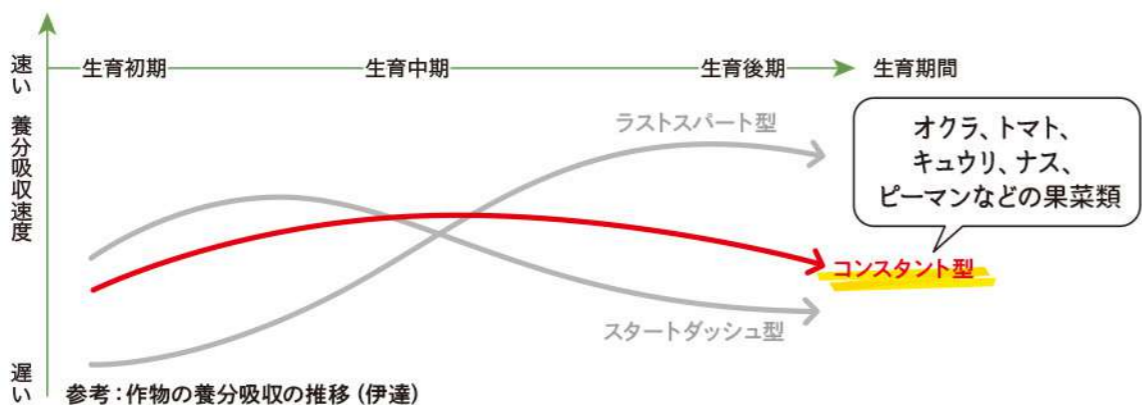
■オクラ（春植）の施肥基準（kg/10a）（沖縄県野菜栽培要領）

成分	基肥(kg)	追肥(kg)				計
		1回目	2回目	3回目	4回目	
窒素(N)	12	4	4	4	4	28



POINT! オクラの施肥ポイント

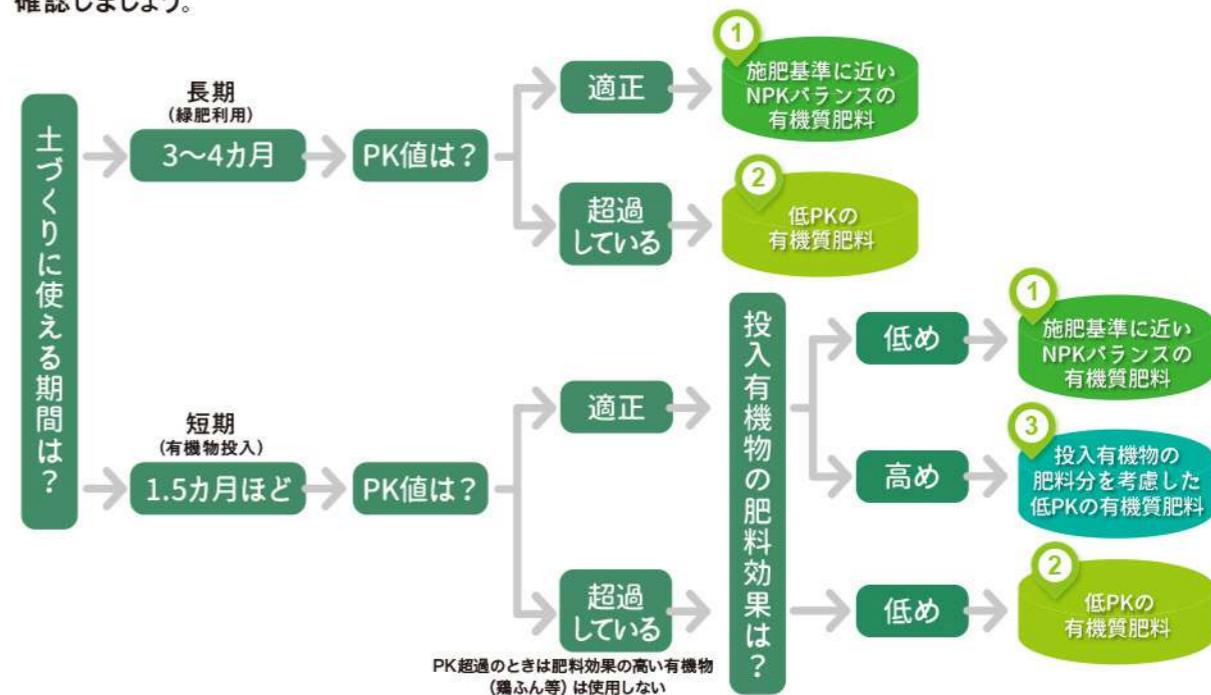
基肥は少なめ、追肥を主体とします。オクラは肥料の吸収力が強く、基肥に窒素が多いと敏感に反応して過繁茂となり、着蕾率悪化、落果増加につながり減収となる恐れがあります。第1回追肥は開花始め、2回目以降は定期的（15～30日おき）に施し、草勢維持に努めましょう。切り戻し時は、① 切り戻しの1週間前、② 再収穫始めに追肥を加えます。



基肥の施用例

1. 基肥に利用する有機質肥料を選ぶ

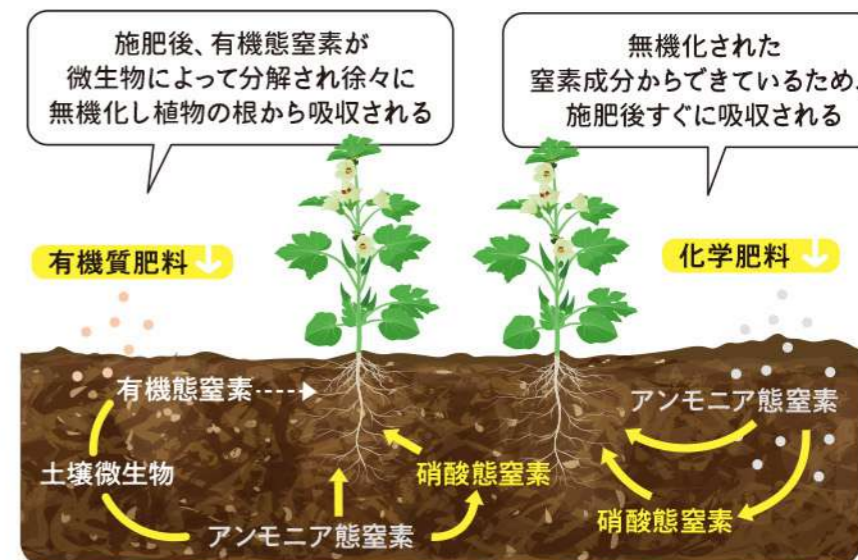
オクラの特裁基準達成へ向けて、まずは基肥の有機質肥料への置き換えを検討しましょう。土づくり期間の長さや、土壌にリン酸(P)及びカリウム(K)がどの程度蓄積しているかによって、基肥に最適な有機質肥料が異なります。土壌診断の結果を基に、以下のチェックフローで、どのような有機質肥料を導入すべきか確認しましょう。



- ・ 期間の長短による土づくりの2パターン(緑肥利用/有機物投入)については「基礎技術編」土づくりの章を確認してください。
- ・ PK値が蓄積している(基準を超過している)とは、リン酸とカリウムの数値がそれぞれ50mg/100g以上の場合をいいます。

有機質肥料を使う際の注意点

特別栽培では、有機質肥料と化学肥料との違いをよく理解することが重要です。両者の大きな違いは、窒素の無機化*におけるプロセスにあります。有機質肥料は、化学肥料に比べ、肥効がゆっくり、地温によって左右されることもあるため、気温が低くなる時期は早めに施肥をするなど注意が必要です。



*窒素の無機化…土壌中の有機態窒素が微生物によって分解され、植物が吸収しやすいアンモニア、硝酸等の無機態窒素に変化すること

肥培管理
特裁における施肥

2. 基肥の施肥量を決定する

基肥として最適な有機質肥料の種類を確認したら、施肥量を決定しましょう。使用する有機質肥料に含まれる各成分の割合や肥効率を考慮し、沖縄県の施肥基準及び以下の計算式を基に10a当たり施肥量を算出します。

前ページのチェックフローで示した「施肥基準に近いNPKバランスの有機質肥料」「低PKの有機質肥料」「投入有機物の肥料分を考慮した低PKの有機質肥料」の3つについて、施肥量計算の具体例を見ていきましょう。

■オクラの施肥基準 単位: kg/10a

成分	基肥	追肥				合計
		1回目	2回目	3回目	4回目	
窒素 (N)	12	4	4	4	4	28
リン (P)	11	2	2	2	2	19
カリ (K)	11	3	3	3	3	23

沖縄県野菜栽培要領

実践! 肥効率を考慮した10a当たり施肥量 (kg) の計算

$$\text{施肥量} = \frac{\text{基準成分量}}{\text{成分含有率}} \div \text{肥効率}$$

基準成分量: 投入したい栄養素の単位当たり成分量。
沖縄県の施肥基準及び土壌診断結果を基に決定する。
成分含有率: 使用する有機質肥料に含まれる各成分の割合。
N:P:K=6:8:4の肥料製品なら窒素成分含有率は0.06 (6%)
肥効率: 肥料効果を化学肥料と比較したときの割合。
化学肥料と同等なら1 (100%)、半分なら0.5 (50%)と表す。

※注意※ 以下①～③の例はEC及び硝酸態窒素の数値が基準値内の場合を想定しています。これらが基準値を超える場合は減肥を検討しましょう。EC基準: 0.3 硝酸態窒素基準: 10

1 施肥基準に近いNPKバランスの有機質肥料

N:P:K=6:8:4の有機質肥料 (窒素肥効率100%) を使用する場合は10a当たり施肥量を、上の計算式を基に窒素について算出します。

成分	基肥
窒素 (N)	12
リン (P)	16
カリ (K)	8

$$\text{施肥量} = \frac{\text{基準成分量}}{\text{成分含有率}} \div \text{肥効率} = \frac{12}{0.06} \div 1 = 200 \quad \therefore 10\text{aあたり施肥量 } 200\text{kg}$$

なお、このときのリン (P)、カリ (K) の10a当たり成分量についても、有機質肥料の成分含有率から算出し、把握しておきましょう。

リン (P) 200kg×0.08=16kg (肥効率100%)
カリ (K) 200kg×0.04=8kg (肥効率100%)

2 低PKの有機質肥料

N:P:K=5:2:1の発酵菜種油粕 (窒素肥効率70%) を使用する場合は10a当たり施肥量を、①と同様、窒素について算出します。

成分	基肥
窒素 (N)	12
リン (P)	6.8
カリ (K)	3.4

$$\text{施肥量} = \frac{\text{基準成分量}}{\text{成分含有率}} \div \text{肥効率} = \frac{12}{0.05} \div 0.7 = 342 \quad \therefore 10\text{aあたり施肥量 } 342\text{kg}$$

リン、カリの成分量は上記①の計算を参考に算出してください。(いずれも肥効率100%)

3 投入有機物の肥料分を考慮した低PKの有機質肥料

成分	基肥
窒素 (N)	12
リン (P)	61.5
カリ (K)	54.5

土づくり段階でN:P:K=1:2.3:2.1の牛ふん・豚ふん完熟堆肥 (窒素肥効率20%) を使用し、基肥に②と同じ発酵菜種油粕 (窒素肥効率70%) を使用する場合は10a当たり施肥量を、窒素成分量が堆肥分と合わせて基準の12kgに達するよう計算します。(家畜ふん堆肥はPKを多く含むため、基肥はPK成分量が少ない有機質肥料を選択)

$$\text{堆肥の窒素成分量} = \text{基準施肥量} \times \text{窒素肥効率} \times \text{窒素含有率} \quad \text{※基準施肥量}$$

$$= 2,500 \times 0.2 \times 0.01 = 5 \quad \text{※沖縄県の施肥基準における堆肥施肥量: 2,500kg/10a}$$

$$\text{基肥の施肥量} = \frac{(\text{基準成分量} - \text{堆肥の窒素成分量})}{\text{成分含有率}} \div \text{肥効率}$$

$$= \frac{(12 - 5)}{0.05} \div 0.7 = 200 \quad \therefore 10\text{aあたり施肥量 } 200\text{kg}$$

リン、カリの成分量は上記①の計算を参考に算出してください。(いずれも肥効率100%)

PKの成分量が施肥基準を超過してしまうため、追肥は窒素主体とする

追肥の施用例

追肥は化学肥料中心に行いますが、化学肥料由来の窒素成分量を10a当たり14kg以下に抑える必要があります。基肥を有機質肥料に置き換えた場合の追肥の施用例と特別栽培における施肥時のポイントを見ていきましょう。

■追肥の施用例: オクラ

単位: kg/10a

回	時期	資材名	施肥量	成分量			カリ (K)
				窒素 (N) 化学由来	窒素 (N) 有機由来	リン (P)	
1	開花始め	有機684号*	66	1.49	2.48	5.28	2.64
2	30日おき	BB804	22	3.96	-	2.2	3.08
3	30日おき	BB804	22	3.96	-	2.2	3.08
4	30日おき	BB804	22	3.96	-	2.2	3.08
追肥合計			-	13.37	2.48	11.88	11.88

沖縄県野菜栽培要領

N:P:K=6:8:4の有機配合肥料 (有機684号等) と、N:P:K=18:10:14の化成肥料 (BB804等) を使用する場合は10a当たり施肥量を、追肥の回数ごとに、前述の計算式を基に窒素について算出し、化学由来の窒素成分量が合計が14kgを超えないように注意します。また、このときのリン (P)、カリ (K) の各成分量についても、基肥のときと同様に算出し、把握しておきましょう。

化学肥料のみでは特栽培基準を超過してしまいます。有機配合肥料を活用しましょう。

※ 窒素成分比の割合は有機質由来62.5%、化成由来37.5%

・作型で施肥量が変わるため目安として参考にしてください。
・有機質肥料は、気温が高い時期に効きがよくなるので、化学肥料と置き換えるなど適宜使い分けが可能です。

POINT! 追肥のポイント

化学肥料と有機質肥料の気温による使い分け

気温が高い時期: 有機質肥料を積極的に使用 (効き方がよくなるため)
気温が低い時期: 化学肥料中心 (有機質肥料の分解に時間がかかるため)

追肥の時期と頻度

草勢や葉色を確認し、肥料の欠乏や過剰を起こさないよう開花時からこまめに追肥を行う。
一気に追肥をすると過繁茂となり、病害虫を誘引したり、着蕾が悪く落果も多くなるので注意。
→ 草勢の判断は次ページ参照

悪天候続きの際の追肥

曇天時は蒸散作用が低下し、根からの肥料吸収が鈍化するため、欠乏症の発現可能性が高くなる。対策として、液肥の葉面散布が効果的である。

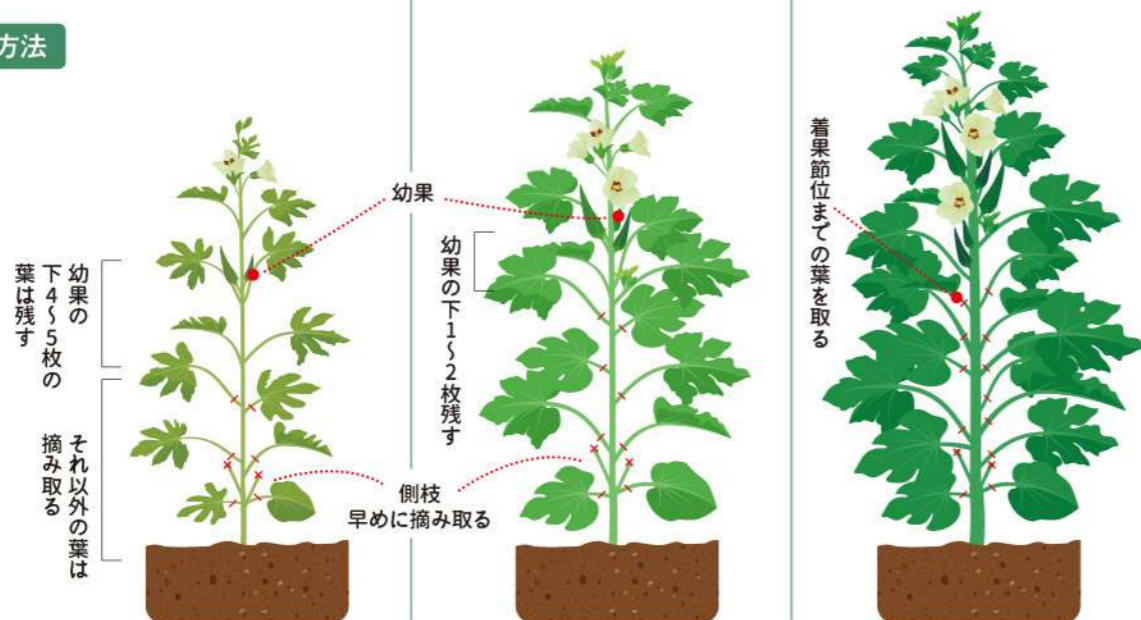
- 窒素 …………… 葉面からの吸収率が高い尿素系窒素成分を含む液肥や、光合成産物であるアミノ酸を葉面散布する。
- マグネシウム …… カリウム等の蓄積による吸収阻害でマグネシウム欠乏が起こりやすくなるため、マグネシウム資材を葉面散布する。
- 微量元素 …… 次ページの欠乏症事例を参考に特定の微量元素、もしくは総合微量元素を葉面散布する。

草勢判断と摘葉

追肥のタイミングや施肥量を計るため、茎や葉など部位ごとの状態から草勢を判断しましょう。適度な草勢を保つため、摘葉はオクラの状態に応じて行うことが重要です。以下、草勢判断と摘葉のポイントを見ていきます。

	草勢が弱い	適度な草勢	草勢が強い
茎の太さ	細い	普通	太い
葉の状態	大きさ：小さい 色：薄い 形：刻みが深い	大きさ：小葉幅8cm程度 色：明るい緑	大きさ：大きい 色：濃い 形：刻みが浅い
開花位置	花の上に葉が1~2枚	花の上に葉が3~4枚	花の上に葉が5枚以上
生理障害	窒素欠乏  葉が針状になり、葉色は黄緑~淡黄色	なし 適度な草勢の場合、生理障害は発生しない  小葉幅 8cm 健康な葉	窒素過剰  葉は暗緑色で下向きにカップ化し、緑が黄化

摘葉方法



資料提供：タキイ種苗 野菜栽培マニュアル

オクラの栄養障害

オクラの生育過程で土壌養分の過不足により起こる栄養障害のうち、特にしやすいものを以下に取り上げます。葉に現れる症状から診断し、その原因と対策を考えましょう。窒素欠乏と似た症状もあるので、誤って窒素を過剰施肥しないよう注意が必要です。

カリ欠乏

画像提供：沖縄県農業研究センター 土壌環境班



【症状】 下位葉から葉脈間が淡緑~黄変

【原因】 ① 窒素過剰、カリウム不足で発生しやすい

② 茎葉の過繁茂で果実が日陰になってしまっている（日照不足）

【対策】 ・窒素の過剰施肥を控える
・カリ資材を施用する
・摘葉などによる光線の確保

鉄欠乏



生育中期からの欠乏処理で上位葉の葉脈の緑色を残して黄化

マンガン欠乏



下位葉での症状が強く、上位では軽度

マグネシウム欠乏



古葉の葉脈間が退緑

【対策】 該当資材等を施用する（葉面散布も効果的）

葉面散布の効果とポイント

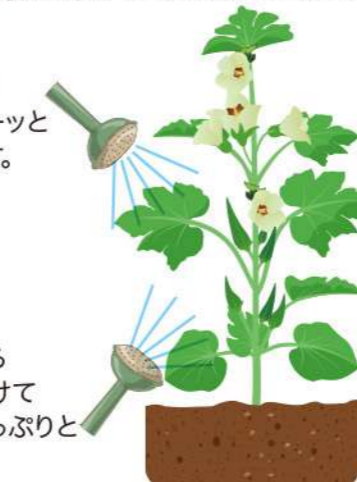
栄養障害の予防・早期回復には葉面散布が効果的です。葉面散布は、成り疲れ予防、結実肥大促進のほか、根の養分吸収力が低下して追肥がしにくいときなどにも効果があります。

【葉の表】

上からサーッと
なでおろす。

【葉の裏】

斜め下から
葉裏に向けて
丁寧にたっぷり



各要素の葉面散布濃度

肥料要素	使用化合物	散布濃度(希釈倍率)	備考
窒素	尿素	0.4~2.5% (400倍)	
リン酸	リン酸一ナトリウム	0.2~0.5% (500倍)	
カリ	リン酸一カリウム	0.2~0.5% (500倍)	
カルシウム	塩化カルシウム	0.2~0.5% (500倍)	遅効性
マグネシウム	塩化マグネシウム	0.2~0.5% (500倍)	
ホウ素	ホウ砂	0.2% (1,000倍)	消石灰混用
マンガン	硫酸マンガン	0.1~0.2% (1,000倍)	消石灰混用
鉄	キレート鉄	0.1% (1,000倍)	
亜鉛	塩化亜鉛	0.1~0.2% (1,000倍)	消石灰混用
モリブデン	モリブデン酸ソーダ	0.03% (3,000倍)	

参考：(野菜園芸大辞典、養賢堂)

※葉面散布を行う場合は、葉害等を生じる可能性があるため、用いる肥料のラベルを確認の上散布する。